

ウイスマン学派と パールマン教授

松 井 七 郎

四二年という長期に亘るウイスマン大学の数壇を昨年六月
停年退職したセリグ・パールマン (Selig Perlman) 教授は、か
ねての約束を果すためペンシルヴァニア大学へ訪問教授として病
後にもかかわらず赴任したのであるが、そのことが直接の原因と
なつて、同年八月一四日フィラデルフィア市のペンシルヴァニア
病院において脳溢血のため急逝した。享年七〇才であつた。

パールマン教授は一八八八年二月九日ロシア領ポーランドの
ピアリストク (Piatytsk) で生れ、同地で基礎教育を受けたが、
その当時のロシアにおけるインテリゲンチヤの誰もがさうであつ
たように、教授も新知識を求めるといふ心を抱いてイタリヤ
のナポリ大学へ留学したのである。そこで幸運にもたまたま米人
ウォーリング (William English Walling) 氏と知り合ふことと
なつた。ウォーリング氏はジャーナリストで、その後社会主義者
となり米國社会党に入党したが、同党の第一次大戦時における反
戦論に反対して脱党、その後 AFL のためにつくした自由主義
者であつた。彼はパールマンの学問的才能を認め、米國留学の資

金を提供した。ロシア青年パールマンがウイスマン大学に学
ぶようになったのはこのようないきさつからである。マルキシズ
ムの洗礼を受け、革命への実践運動に情熱を燃やしていた当時未
だ二〇才の青年であつた彼が、ウイスマン大学に学ぶに至つ
てその思想に大きな変化をもたらしたのは何故であつたであらう
か。ここで筆者は当時のウイスマン大学の思想的環境を少し
説明しなければならぬ。

一九世紀末から二〇世紀にかけてウイスマン大学は、アメ
リカにおける最もリベラルな大学の一つであつた。グレンジャー
やポピュリストの影響を受けたバスカム (John Bascom) 総長は、
労働騎士団を初めとするその他の労働組合を擁護し、少数ではあ
るが無政府主義者の参加した、一八八六年の八時間労働制確立の
ための罷業をさへ応援した程であつた。また、ヴァン・ハイズ
(Charles R. Van Hise) 総長も地質学者であつたが、非常に広
い社会的視野に立つ自由主義者であつた。さらに歴史学部の著名
なターナー (Frederick Jackson Turner) 教授は彼の「アメリカ
歴史におけるフロンティアの意義」という有名な論文において、
フロンティアなる概念がアメリカ歴史の重要な特質であること
を指摘し、アメリカ歴史家としてその名声を不朽なものたらしめ
たが、経済学においていわゆるウイスマン学派の基礎を築い
たイリー (Richard T. Ely) 教授をウイスマン大学に招聘
したのはこのターナー教授であつた。

イリー教授はドイツに留学し、ハイデルベルグ大学において旧

歴史学派の指導者の一人であるクニース (Karl Kries) に主として師事したが、後ベルリン大学においてワグナー (Adolf Wagner) の教えを受けたので、ドイツ歴史学派の影響を受け、帰米後最初はジョンズ・ホプキンス大学において経済学を講じた。一八九二年ウイスコンシン大学に赴任して以来は、人道主義や基督教的社会主義に立脚する社会改良主義という彼の主張は益々強化されていった。そのため一部の人々からイリーの学説は急進的で社会に有害であると批判され、大学理事会へもそのことがしばしば訴えられたが、理事会は学問研究の自由という立場から反ってイリーを擁護しつづけたのであった。即ち当時のウイスコンシン州知事は、後に上院議員となり、また一九二四年には進歩党から大統領に立候補したラフォレット (Robert M. La Follette) 氏であり、政治的にもウイスコンシンには自由主義的な空気が横溢していたのである。イリー教授がウイスコンシン大学の教壇に立つようになると、ジョンズ・ホプキンス大学の彼の門弟である経済学者のコンモンズ (John R. Commons) や社会学者のロス (E. A. Ross) 等をつぎつぎと大学へ招聘し、益々自由主義的な学門的雰囲気強化していった。

イリー教授は一八八六年に "The Labor Movement in America" を出版したが、彼はその序文においてこの書物は将来 "History of Labor in the New World" という名称にふさわしい書物を完成するための単なるスケッチに過ぎないと書いている。ドイツにおいて歴史学派の影響を受けたイリーが、フランス

においてはすでに中世紀のギルドに関する資料が蒐集されているし、イギリスでも各種の歴史的組織が結成されて経済史や労働運動に関する資料が蒐集されているのに、アメリカにおいて未だかかる企てがなされていないことを遺憾に思ったのは当然なことであつた。イリーは有力者に訴え一九〇四年に "American Bureau of Industrial Research" を組織し、米國産業社会に関する歴史的資料の蒐集を計画し、コンモンズ教授をその責任者に任命した。コンモンズはデュレーン大学の歴史学、政治学のフイリップス (U. B. Phillips) 教授、ウイスコンシン大学法律学のギルモア (E. A. Gilmore) 教授、労働者のサムナー (Helen L. Sumner) アメリカ労働法協会専務理事アンドリュー (John B. Andrews) 等を協力者として、全國の主要図書館、労働組合本部、経営者協会等において、産業問題、労使関係、労働組合などに関する図書・新聞・雑誌・パンフレット・組合規約・大会議事録・裁判所の判例等に関する龐大な資料の蒐集を行なつたが、コンモンズの提案に基づき一般研究者の利用に資するため、これら資料のうち特に重要なものだけを集めて出版したものが、一〇巻からなる "Documentary History of American Industrial Society" である。

コンモンズはこの資料史を基礎として後に出版された四巻から成る "History of Labor in the U. S." の編纂を計画したのであるが、パールマン教授がウイスコンシン大学に入学したのは正にその時であつて、彼はこの米國労働運動史研究の中心的スタッフ

として参加するに至つたのである。当時はウイスコンシン自由主義の黄金時代であつたので、パールマンは単にイリーやコンモンズだけでなく、ターナーやロスその他大学における進歩的、自由主義的思想の影響を多分に受けたのであつた。ウイスコンシンに發展した制度学派は、系譜的にはドイツの歴史学派やターナー教授のフロンティヤーなどの思想的並びに専門研究方法論的な影響を受けたが、特にコンモンズにおいては実用主義の哲学及び行動心理学の影響を無視することはできない。かようにウイスコンシン学派はイリーによって始められ、コンモンズ及びパールマンに於て確立されたものであるが、コンモンズの興味は“*Institutional Economics*”と“*The Economics of Collective Action*”に示されるように、その晩年は経済理論の方に向けられていったが、パールマンは主として労働運動及び労働組合の分野において制度学派的理論を樹立したとみることができよう。

パールマンの学才はコンモンズによつてはやくから認められ、学生時代すでに研究助手に任命された程であつて、コンモンズの労働運動史研究の重要なスタッフであつた。一九一〇年にはすでにパチェラー・オブ・アーツの称号を得、一九一三年には市民権を獲得して米国民となつた。また一九一三年から一九一五年まで“*U. S. Commission on Industrial Relations*”の特別調査委員に任命されて労働問題の研究に従事し、一九一五年にはドクター・オブ・フィロソフィーの学位を授与された。一九一九年経済学部講師に任命されてから、一九二一年助教、一九二五年進教

授、一九二七年には正教授に進み、一九五七年にはコンモンズ教授の功績を顕彰するために設置されたジョン・アール・コンモンズ講座の最初の教授として任命され、昨年六月停年退職するまでその地位は不動のものであつた。またウイスコンシン在職中には英国のサウス・ウェールズ大学やエルサレムのヘブライ大学等に訪問教授として招かれた。ペンシルヴェニア大学での期待された講義ができなかつたのは、教授を敬慕するものにとつてまことに遺憾なことといわなければならない。

パールマン教授の学問的研究は、コンモンズが門弟達と共に始めた、アメリカ労働運動史の共同研究に参加することによつて始められたが、彼はいうまでもなく制度学派の後継者であつて、労働運動の歴史を政治、社会、経済等の諸制度との関連において把握しようとした。この研究方法は米国の労働運動の分析及びヨーロッパ諸国との比較研究に新しい分野を開拓したのであつて、彼は一九一八年に出版された米國労働運動史の初めの二巻の執筆者の一人であつたが、彼に割当てられた問題は二八七〇年代の社会主義、無政府主義、サンディカリズム等であつた。彼は当時すでにマルキシズムの思想を放棄していたが、これらの急進主義思想を決して過少評価するようにはなく、あくまでもこれを客観的に取扱ひ、彼等の果たした役割に正当な評価をしていることは彼の学問的態度として高く評価されるべきである。さらに、一九三二年にはタフト教授と共著で労働運動史の第四巻を出版した。

一九三二年に“*History of Trade Unionism in the U. S.*”

を出版したが、これは全四巻に亘る労働運動史を基礎として、労働組合運動の歴史を簡潔に纏めたものであって、今日アメリカ労働組合運動史の古典となっている。ところが同書は著者に無断でソ連において再出版され、そのソ連版にはブラウダー (Earl Browder) の序文が添えられているが、彼は資本主義的国家発展の一般法則に対するアメリカの特殊性を認めず、パールマンの思想的立場を示す最も重要な「無産者独裁と労働組合主義」という結論的な最後の章を特に削除している。そして興味あることにこのソ連版の書物を、マルクス・エンゲルス・レーニン研究所の創立者であるリアザノフ氏が、感謝状をつけてパールマン教授に送ってきたことであった。こうしたソ連獨特な不忌諱なやり方について、教授はよく教室でわれわれ学生に話してくれたものである。

パールマン教授の最も重要な著書は、いうまでもなく一九二八年に出版された“A Theory of the Labor Movement”であり、すでにイタリア、ドイツ、スペイン、インドネシア、日本(筆者訳「労働運動の理論」法政大学出版局版)等の諸外国語に翻訳されたのみならず、その後内外において非常な論争を惹起した。同書は二編より構成されているが、第一編はソ連、ドイツ、イギリス、アメリカ等の労働運動史を制度学派的立場から簡単に略述し、第二編においては、これら諸外国における労働運動の理論を展開している。パールマン教授は数ヶ国語をマスターし且つヨーロッパ諸国の歴史にも精通し、その鋭い洞察力と正しい判断力は貴重

なものといふべきであろう。第二編において、彼は従来インテリゲンチヤが、社会を根本的に変革しようとする彼らのプログラムに、一般労働者の興味を誘い込もうとすることを鋭く攻撃している。教授によれば、インテリゲンチヤは自己の観念的理論を専ら労働者に強制することにのみ狂奔し、一般労働者が實際何を考へ何を要求しているかに十分の考慮を払っていないかまたは彼等の考え方を誤解しているのである。一般労働者の関心は人類の改造とか社会の再建というような高遠な理想ではなく、彼らの職場における日常の利益を擁護し得るような組織を確立することにあるというのである。勿論、三〇年前に展開された彼の理論には修正されるべき点もあるが、彼の基本的命題である労働者は常に彼の職場における地位の向上に主力を注ぐものであるという考え方は、今日においても労働組合の不変の原理でなければならない。

今日労働組合が資本主義社会における不可欠の制度となった時代には、これに好意を示す者も多くなってきたが、パールマン教授は米国において労働組合を擁護することが危険思想視された時代に勇敢にもこれを弁護し、組合の発展を育成した少数者の一人であった。彼は自由世界は数個の集団の間に権力が分散され、勢力の均衡が保たれるという多元的組織をもつものであり、労働組合はその集団の中で最も重要なものの一つであると主張したのであって、民主的社会における組合の重要性について、世論を啓蒙した功績は偉大なものである。したがって、彼の多くの著書、論文、門弟の外に労働組合運動そのものもまた、教授の残した重要

な遺産といふことができるであろう。特にヨーロッパの組合運動がイデオロギー的な急進政策に重点をおいていたのに対し、アメリカの組合が団体交渉による労使関係の現実的な接近方法を採用したところに、米國労働組合の特質がある点を指摘したことは、教授の大きな貢献といわなければならない。

彼はコンモンズの始めた「資本主義及び社会主義」という講座を担当していたが、彼の温い人間味と広い智的理解力、さらに楽しいユーモアを交えた機智とがその表現に活気を添え、才氣縦横な類推が彼の理論を学生の思想の中に永久的に印象づけたのであり、したがって彼の講義は単に経済学部だけでなく、他学部からも多数の学生を吸引するような魅力的な内容豊富なものであった。パールマン教授は常に学生を同僚として取扱ひ、また研究室や家庭を喜んで学生に解放し、学生の私生活もよくめぐらさうをみたが、それは彼が学究の徒であると同時に眞の教育者であつたからであらう。彼の教えを受けた門下生は今日学界、実業界、官界、労働界等あらゆる方面に活躍しているだけでなく、國務省の労働官、ILO、國際自由労働關係等國際労働運動の舞台においても大いに活躍している。筆者のウイスコンシン在学時代の指導教授はコンモンズであつたが、同時に当時準教授で脂の乗りきつたパールマン教授の薫陶を受けたことはまことに幸といふべきである。特に学位論文の研究指導にあたって示された教授の愛情には忘れがたいものがある。終戦後三度母校ウイスコンシン大学を訪問、講演する機会に恵まれたが、その度毎に示された教授の恩情

は今更のように筆者の心を暖めて止まない。

教授はまた主義のために献身的努力を払つたのであつて、知事の任命した人権擁護委員会、ウイスコンシン大学の労働大学、イスラエル問題の如きも常に学問的研究と同様に委らざる情熱を燃やしてその仕事に携つたのである。パールマン教授はアメリカが彼に才能を發揮させる機会を与へてくれたことに對し、そしてまたウォーリングやコンモンズさらにウイスコンシン大学が彼に与へた恩情に對し、深い感謝を捧げると同時に、彼らに對する報恩が、學者としてまた教育者とし、そしてまた公僕として、彼の最善を捧げることにあることをかたく信じて常に努力を怠らなかつた。

教授は State Commission, American Economic Association, American Jewish Committee, Jewish Publication Society, University Club 等の会員であつた。彼は一九一八年に Eva Shaber 嬢と結婚したが、不幸にも夫人は一九三〇年デビッド及びマークの二児を残して死亡した。マークは父の志を継ぎ現在シヨンプ・ホプキンス大学の経済学部の教授である。教授はその後 Eva Shaber の妹 Fannie Fannie Shaber 嬢と再婚し、エバ及びラッシュェルの二人の女兒を設けた。

パールマンの死後彼に与えられた名譽は、かつての彼の学生の一人であつた、現米國上院議員モース (Wayne Morse) が上院において、彼の米國の学界、労働界等に尽した貢献に對して感謝決議を提案可決したこと、およびウイスコンシン州議會は彼の停

年退職にさいして、彼の大学及び州に対する貢献に対して感謝の
共同決議を可決したことが特記される。さうに昨年一月二
〇日には、ウイスコンシン大学経済学部及び労働大学共催で、ヤ
ング経済学部長司会の下に、パールマン未亡人及びマーク・パー
ルマン教授を主賓として記念追悼会を催し、ウイスコンシン大学
ハリントン副総長が謝辞を述べ、パールマン教授のかつての同輩
であり友人であつた、前労働顧問省労働経済学者サーポス (David
J. Sapos) 及び現ブラウン大学教授タフト (Philip Taft) の両
氏が記念講演をしてパールマン教授の功績を讃えた。また昨年の
一月二八、二九の両日ワシントン市で開催された米労使関係
研究学会の第一二回大会においても、スリクター並びにパールマ
ン両教授のため特別記念追悼会が催され、タフト (Philip Taft) 及
びステファンスキー (Ben Stepanky) 両氏がパールマンの功
績を讃えた。労働問題の研究に生涯を捧げた彼をたたえるのに誠
にふさわしい会合であつたといわなければならない。

(一九六〇・一二五)